

杉本徳久です。K F C・唐沢治様、救世軍・山谷真様 最終のご連絡です。

杉本徳久 Sugimoto Norihisa <sugimotonorihisa@gmail.com>

2010年12月8日 23:02:31 JST

(唐沢氏から提訴の予告を受けた杉本氏が、待ちきれずに「早く俺を提訴しろ！」と唐沢氏にせつついたメールである。「最終のご連絡です。」と書かれているが、一体、何度目の最後通牒であろうか。このメールの後も、杉本氏の罵倒と恫喝の手紙は延々と続く。このメールも、必要もないのに、ヴィオロン、唐沢氏、山谷少佐の三人に送られている。)

前略、K F C・唐沢治様、CC 救世軍・山谷真様

「随想 吉祥寺の森から」の杉本徳久です。

8月6日にあなたから送られてきました、民事訴訟提起を通告する「お知らせの件」のメールの件ですが、その後、弁護士さんとの協議はどうなっておりますか。

訴状の到着をお待ちしていますが、どうなりましたでしょうか。

そちらの弁護士名、弁護士事務所の連絡先はどこですか。

神奈川県警に告訴なさったその後の進展はどうなりましたか。

(一般的に、訴訟沙汰になれば、当事者同士の話し合いは行なわれないのが通常である。提訴すると言った人間が、訴えようとしている相手に、進行状況を報告しなければならぬ義務はない。にも関わらず、杉本氏は、よくもこれだけ裁判自体を催促したり、進行状況の報告を促したりできるものである。それに返答があると考えているのだとしたら、非常識も甚だしい。杉本氏の短気さ、忍耐のなさがよく分かる文面である。

ちなみに、ヴィオロンが唐沢氏に対して、杉本氏を民事提訴するように依頼したり、そのような願望を伝えた事実はない。唐沢氏から杉本氏に対する提訴予告は、ヴィオロンにとっても不意の知らせであり、事前の打ち合わせなども一切なかった。その後、なぜその提訴が行われないのかについても、唐沢氏からヴィオロンに対する明確な説明はなかった。その間、激高した杉本氏が次々とヴィオロンに恫喝と罵倒のメールを送って来る有様だっ

たので、正直、筆者にとっても、唐沢氏の提訴予告は随分、厄介な問題であった。

当時、筆者は唐沢氏に何度か、「提訴を予告したのであれば、関係者への影響もある。たとえどれほど相手が卑劣な人間であったとしても、いつまでも態度を明確にしないことにより、人をいたずらに精神的に追い詰めるようなやり方は望ましくない。」と告げはしたが、唐沢氏からは明確な回答はなかった。

なぜ唐沢氏は杉本氏への提訴予告を行なったのか？ これについては、推測しか残されていないが、おそらく唐沢氏は、自分自身が杉本氏に誹謗されていることから、杉本氏に対して何らかの対抗措置が必要だと考えたことに加え、自分自身が KFC の元信徒を刑事告訴したという文脈から、私をも何らかの形で訴訟沙汰に巻き込もうとしたのではないかと考えられる。「ヴィオロンさんのため」というのは、口実に過ぎない。本来、唐沢氏が提訴を望むならば、自分の権利を守るために、自分の名で行うべきなのであり、筆者の了承を得ないまま、「ヴィオロンさんのために提訴する」という文脈は成立しない。

しかし、唐沢氏は自分の利益のために杉本氏を訴えるのが美しくないと考えたか、もしくは、自分が矢面に立つことを回避するためなのか、理由は不明であるが、「ヴィオロンさんのために提訴を予告している」という話を同意なしに作り上げ、ヴィオロン対杉本という構図を作りあげようとしていた。要は、唐沢氏は自らリスクを払わずに、他者を矢面に立たせて杉本氏に対峙させようとしていたのであり、そのような姿勢は、唐沢氏が後にバックアップした坂井氏対杉本氏の裁判においても、明確に確認できる。

こうしたことを見るならば、唐沢氏は、はからずも、クリスチャンを次々と裁判に訴える杉本氏の活動について補完的な役割を果たしたと言えるのである。唐沢氏は、あたかも杉本氏に攻撃されたクリスチャンを擁護し、彼らの侵害された権利の回復を助力するかのように見せかけながら、その実、杉本氏と同じ方法で、クリスチャンを巧みに裁判に引き込んでいき、さらには、杉本氏の怒りをいたずらに煽ることによって、より対立を深化させ、クリスチャンに圧迫を加えることに貢献するという役割を果たしたのである。

唐沢氏は、この提訴予告の他にも、ヴィオロンに関する憶測に過ぎない不正確な記事を、一切、筆者には相談なく、突然、発表することがよくあった。そのようなことが起きると、関係者がその記事に見境なく飛びついては、ヴィオロンが考えたこともないような憶測を広めたり、センセーショナルな事件を勝手に取り上げたりして、事件にはますます尾ひれ背びれがついて膨らんで行くのであった。この点でも、唐沢氏の果たした役割は、事件をいたずらに煽るものでしかなく、何ら解決に貢献するものではなかった。このように、「世の空気」を巧みに操り、自分に都合のよい「雰囲気」を作り出して集団を煽ったりする力は、キリストの御霊から来るものではなく、この世の霊から来るものである。

唐沢氏の行動は、あたかも困っている信者の助力者や擁護者のように振る舞いながら、その実、事態をますます悪化させて信者の立場を貶めることに貢献したという意味で、村上氏や杉本氏と大差ないものであったが、唐沢氏の振る舞いは、彼らに比べ、より巧妙で策略的であった。）

救世軍の牧師でもある山谷真さんは今回の件で関係者の
お一人ということでしたが、その後、何もご連絡がないの
で何をお考えであるのか、さっぱりわかりません。

(なぜ山谷少佐が「今回の件で関係者のお一人」として含まれているのか、筆者は全く事
情を知らない。唐沢氏が杉本氏にそのように伝えた事実があったのかどうかも知らない。)

弁護士などの「夏休み期間」で手続きがお休みということ
でしたが、すでに待降節に入りました。

どういふことでしょうか。

以上の件につきまして、これ以上はお待ちできませんので、
責任を持って説明していただけますよう、強く要望いたし
ます。

(こうして、自分の願望を他人に叶えてもらいたい時に、杉本氏は人に「お願い」しよ
うとはせず、「責任を取れ」などの形で常に命令するのであった。だが、実際には、唐沢氏は
杉本氏に提訴予告をしたからと言って、何らの説明義務も負っていない。だが、杉本氏に
はそのようなことも理解できず、自分が事態の蚊帳の外に置かれているということだけで、
我慢がならず、馬鹿にされているかのような思い込みから抜け出ることができず、激高す
るばかりで、事態が明白になるまで、忍耐強く待つということもできないのである。
本来ならば、誰かから提訴すると言われて、いつまで経っても訴状が来ないとなれば、喜
んでも良いくらいである。だが、杉本氏は、わずかでも心理的プレッシャーがかかること
に耐えられず、見境なく他人に食ってかかる性格であることがこの文面から良く分かる。)

私としては、唐沢さんに対して非常に不愉快な念が強まっ
ております。

ご自身のブログではあれこれいぶん多くのトピックにつ
いてお書きですが、なぜ、私への民事訴訟通告については
その後、無言を貫かれるのでしょうか。しかもブログには
「杉本徳久」という私の名が今もそのまま、民事訴訟通告に
ついてそのまま放置されております。

ご自身の責任についてどのようにお考えでしょうか。

これで問い合わせは5回を超えています。これが最終のご連絡です。十分な時間もとりましたし、手順も踏んでいます。

このままだやむやに曖昧な処理をすることはありませんで、その点、お覚悟下さい。若輩者だとあまり舐められるようですと、こちらも思い切って臨みます。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

(人から批判されることに耐えられず、少しでも自尊心を傷つけられたと感じると、早速、他者に憤りをぶつけることしかできない杉本氏の短気と自己中心性がよく伝わって来る文面である。杉本氏が実名でブログを始めたのも、おそらくは、「キリスト教界の改革者」、「弱者の味方」という美しい自己イメージを創り出すことが目的であったものと思う。それがどうにももうまくいかなくなって、自分をヒーローにすることができなくなり、自分の活動に様々な批判が集中して来ると、相手を誹謗したり、暗闇で脅しつけたり、このようなメールを送って、「不愉快だ!」とか、「責任を取れよ」、「覚悟しろ」とか、「これが最後だぞ」とか、「若輩者だと思って俺様をなめるなよ」とか、「思い切った措置に出る」といったような、何の意味もない陳腐な紋切り型の啖呵を切ることで、対抗意識をむき出しにし、できもしない報復行為をほのめかすことで、「俺は負けてはいない」と思いたいのである。だが、杉本氏の恫喝は単なる強弁で、同氏は唐沢氏に対して今に至るまで何らの合法的な報復行為にも及んでいない。実際、できることなど何もなかった。杉本氏が行ったのは、唐沢氏には怖くて直接、当たれないので、唐沢氏の周囲の関係者に暗闇でひたすら弱い者イジメを繰り返し、鬱憤を晴らすことだけであった。あまりにも空疎な文面なので、これ以上の解説は無用であろう。)

1800001

武蔵野市吉祥寺北町1-5-14

杉本徳久

sugimotonorihisa@gmail.com